インド洋津波

「子どもらに心のケアを」

AMDA諏原調整員が帰国

インドネシア・スマトラ島沖の地震と津波被災者の救援のため、甚大な被害を被ったインドネシア・アチェ州を訪れていた救急医療支援のNGO「AMDA(アムダ)」(本部・岡山市)の諏原日出夫・調整員(58)が帰国。被災直後の現地の状況や災害弱者である子どもらへの〈心のケア〉の重要性を訴えた。

(聞き手・兒島 圭一)

被災地の悲惨な様子を語る諏原調整員(岡山市のAMDA本部で)

支援チーム派遣費不足

——津波発生から二日後(昨年十二月二十八日)に現地入りしたときの印象は。

「街が異常に静かだった。活気があるはずの繁華街もボランティア団体の車が通るくらい。閑散としていた。空港周辺の高台に、ブルーシートのテントを張っただけの千人ぐらいの"難民キャンプ"ができていた。『新たな津波が怖いから低地に住めない』ということだった。余震が続き、過度におびえていた」

——遺体の状況は。

「安置所は特になく、広場のようなところに三百体くらい無造作に並べられていた。シートもかけられず、放置されたままのがほとんどでもう腐敗が始まっていた」

——病院は稼働していたのか。

「州内七か所の病院のうち、稼働していたのは軍病院だけ。ベッド百七十床のうち、入院患者は約三百人。渡り廊下にさえ負傷者が、横たわっていた。まさに野戦病院。医師六人で一日三十人くらいの患者の手術、治療を行っていた。入院しても、食料を持参する家族がいなければ、患者は食べるものさえなかった」

——子どもの様子は。

「致命的な外傷でなければ子どもでも治療は後回し。泣きながら横になっている子どもに母親らしき女性が、うちわであおいでいた。むごい光景だった」

——両親を失った孤児も多いと聞く。

「心のケアが必要。AMDAでは被災児童に読み聞かせる絵本を送るつもりだ。現地の人によると、組織だった誘拐団がアチェに入っているという。本当なら許せない行為だ。誘拐を防ぐため、アチェ州を離れる十六歳以下の子供には身元引受人の認可証のようなものを持参させるよう政府通達しているとも聞いた」

——同州は政府軍と過派の対立が激しいそうが。

「銃撃戦のうわさも聞いた。十四時間かけて食料輸送した時は、安全面を慮して、購入した米(千キロ)と水(二千リットル)を運ぶトックを国連軍の輸送チーに加えてもらった」

——今後のAMDAの活動は。

「アチェ地区では巡回療が中心。高台に避難している人たちは、津波の再を恐れて動かないため、師らが車で避難所を回ることになる。外傷の治療緊急医療が終われば、慢的な病気の治療へと移行する。AMDAから支援チームなどを現地に送る費用不足している。善意の寄をお願いしたい」

メモ

諏原日出夫(すはらひでお) 広島県神辺町生まれ。58歳。一九六五年に広島県立福山工業高を卒業後、三菱電機エンジニアリング株式会社福山製作所に入社。遮断器技術課などでブレーカーの設計を手がける。二〇〇三年八月に定年を待たずに自主退社。AMDAに参加する。妻と一男、二女。岡山市内に単身赴任中。